中国海軍ニュース：2 艘目の空母の配備はいつか？

漢和防務評論 20140425（抄訳）

阿部信行

（訳者コメント）

2013 年 5 月 23 日号の漢和防務評論ネット版に、中国海軍が海南島に新たな空母基地を建設中であるとの記事が掲載されました。昨年この記事を紹介しませんでしたので、今回本記事中で紹介したいと思います。

現在建設中の新たな空母基地は、海南島の南端、現在海軍施設建設中の亜龍湾の西隣りの湾で、グーグルアースの地図では「六道村」になります。

中国国産空母第一号の配備は、全て順調に行けば、2024 年前後であろうと推測しています。この基地は、ベトナム側から見ると、距離が近く攻撃に有利であり、今後中国は、ベトナムとの交渉には慎重にならざるを得ないのではないかと記事は指摘しています。

中国海軍の 2 艘目の空母、すなわち中国国産空母第 1 号は、いつ配備されるのか。現在の空母基地建設の状況、艦載機 J-15 の生産状況等から判断すると、中国国産空母第 1 号は、海南島の新たな空母基地に配備される可能性が最も高い。基地の棧橋の長さ、及び外形は北海艦隊の空母基地と全く同じである。ここで検討するのは、中国海軍の 2 艘目の空母はいつ配備されるか、である。

それを決定する要素は 3 つある。1 つ目は空母の建造が完了する時期、2 つ目は基地建設が完了する時期、3 つ目は J-15 戦闘機の生産が完了する時期である。1 と 3 は本誌がすでに何度も分析しているので、ここでは簡単に述べる。たとえ空母建造が 2014 年に開始されたとしても、旧ソ連が建造したワリヤグ号、クズネツオフ号の建造期間を例にとると、工期は 6 乃至 7 年かかるであろう。その後海上試験に通常は 2 乃至 3 年かかる。この期間は、建造途中にいかなる技術的問題も発生しなかった場合の期間であり、したがって実戦配備までに 8 乃至 10 年かかると推測される。すなわち相当楽観的に見積もって 2024 年前後である。フランスのドゴール号は生産から配備までに 10 年かかった。

現在注目すべきは、海南島の新空母基地の建設状況である。2013 年の衛星写真を見ると、新たな空母基地の規模を推測することが出来る。背後の山並みの高さを地形から判断すると、少なくとも 300 乃至 400 M はある。亜龍湾の山並みの高さとはほぼ同じである。しかし新空母基地の地下施設及び地上施設の建設の規模は亜龍湾の施設よりもはるかに大きい。この判断の根拠は、空母基地の山並み上に発見された施工中の地下倉庫であり、少なくとも 2 つある。したがって背景の山並み全体の内部が階層になっており、当然弾薬庫、燃料タンク等

があろう。地上には、パイロット宿舎、基地施設、司令部ビル等の建設が予想されるが、2013年の段階では未だ建設が開始されていない。栈橋の建設は約2年かかるようだ。亜龍湾の地下施設建設は1995年前後に開始され、約9年かけて巨大な地下施設が2004年に基本的に完成した。

ここから推断すると、新たな空母地下施設の完成までには約8乃至9年かかり、空母船体の建造期間とほぼ同じになる。

新空母基地には、船舶の修理施設の建設は発見されていないが、この点は、非常に重要である。もし最初の国産空母が大連で建造され海南島基地に配備されたならば、2000以降の中国海軍艦船の製造場所と配備場所との強すぎる結び付きはどの程度改善打破されるであろうか。第3世代の中国海軍水上艦艇である051C型ミサイル駆逐艦は通常大連で製造され、北海艦隊に配備されている。また東海、南海艦隊の水上艦は、多数が上海及び広州の造船所で建造されている。大連造船工場の生産する水上艦の推進系統は蒸気タービン及びボイラーであり、上海造船工場の生産する水上艦の推進系統は、ガスタービンである。一つのタイプの水艦を大規模生産して初めてこの強すぎる結び付き（配備の硬直性）を打破することが出来ると思う。例えば、054Aは、すでに北海艦隊に配備され、かつてLUDA級ミサイル駆逐艦は中国の3つの艦隊に配備された。伝統に従えば、中国空軍及び海軍航空部隊の1つの飛行場は、特定の1つの師団に隷属し、1つの飛行場には1乃至2個の航空連隊が駐屯している。1つの飛行場には1つの第3世代作戦機連隊が駐屯している。したがって艦載機連隊がその他の海軍航空部隊と1つの飛行場を共同使用する可能性はほとんど考えられない。海南島には第8、9師団が駐屯する楽東飛行場及び陵水飛行場があるが、飛行場拡張の動きはない。

大連で建造された空母が海南島に配備され、南海艦隊に隷属したならば、保守整備問題は”遼寧”よりも難しくなる。”遼寧”の根拠地は大連に近く、随時保守整備を受けることができる。一旦海南島に配備されると、簡易な修理ドック或いは船台を建設し独立した簡単な保守整備が必要になる可能性がある。そうしないと旧ソ連時代の轍を踏むことになる。当時ソ連が建造した5艘の空母は、配備場所が建造した造船工場から遠く、小さな不具合は修理できず、短命だったといわれている。

次は、艦載機の陸上基地の問題である。2013年の衛星写真では、海南島全体を見ても海軍航空部隊用の新たな飛行場の建設は確認できなかった。これは不思議に思える。通常の下況下では、新たな空母艦載機部隊は自己の陸上飛行場、24機分のJ-15の格納庫、所要の訓練施設、及び司令部ビルが必要になる。2013年には建設の兆候は見られない。たとえ2014年に建設を開始しても、完成には5-6年かかる。そのときには第二グループの24機のJ-15は生産が終了している

はずだ。

海南島に建設される新空母及び戦略核潜水艦（SSBN/SSN）基地は、空母”遼寧”の基地とは異なり、次のような致命的欠点を有する：ベトナム海軍は、すでに相当強力な水面下及び陸上攻撃能力を具備しており、2014年から2艘のKILO636MV型潜水艦の導入を開始した。したがってベトナムは、全部で5艘のKILO636MVがあれば、戦時海南島の空母、及び核潜水艦基地を封鎖することは十分可能である。また新空母基地は、ベトナム海岸から最短で272 KMの距離にある。ベトナム海軍が最近導入したBASTION型陸上発射対艦ミサイル（射程300 KM、機動可能）は、ベトナム海岸から中国の港内に停泊する中国空母を直接攻撃することが出来る。またベトナム軍のSU-22及びSU-30MKV/MK2は中間線のベトナム側から中国海軍空母基地、核戦略潜水艦基地を直接攻撃することが出来る。このほか説明が必要なことは、ベトナム軍は国産の小型潜水艦の装備を開始したことである。これは大きな進歩である。さらにベトナム軍は少量のSCUD-C型弾道ミサイルを保有しており、海南島全域を攻撃することが出来る。

このような国際的な現状の下、海南島の大型空母及び核潜水艦基地は、実際上ベトナムの人質のようなものである。中国は、今後対ベトナム問題を処理する上で相当慎重にならざるを得なくなった。この理由から中国は、今のところ南シナ海に防空識別圏を設定することに慎重になっている。自国の空母及び戦略核潜水艦基地を”潜在敵国”のハイテク兵器の直接射程内に建設するとは、理解しがたいものがある。

”空母基地と防空識別圏”

中国の南シナ海への防空識別圏設定は、2014年1月現在、未設定である。中国は、南シナ海に防空識別圏を設定する問題について、外国メディアがあれこれ論評するのを非難しているが、そのことは、戦時には南シナ海に迅速に防空識別圏を設定せざるを得ないことを暗示している。中国が東シナ海に防空識別圏を設定した際に、外国から思いもよらぬ大きな反撃を受けた。区域外の国家であるベトナム、オーストラリア、インドまで反対を表明した。したがって中国は、この件で多くの敵を作らないよう明らかに戦術を変更したと思われる。

KDRの判断によると、中国は、南シナ海への防空識別圏設定を暫時遅らせる可能性がある。しかし時期の問題であり、遅かれ早かれ設定はするであろう。KDRの入手した情報によると、防空識別圏設定の構想は、南シナ海での空中衝突事件（米軍EP-3機に中国のJ-8戦闘機が接近して衝突）まで遡る。中国は、南シナ海の中国軍事基地に対する米軍の偵察活動を頻繁に非難していた。したがって本来は、南シナ海に先に防空識別圏を設定すべきであった。しかし影響する範囲が大きいため、試験的に東シナ海に先に設定した。反対するのはせいぜい

米国と日本ぐらいと思っていたところ、韓国までもが反対するだけでなく、機に乗じて韓国は自国の防空識別圏を拡大した。

中国が防空識別圏を設定する目的は、第一に米国及び日本の航空偵察に対抗するためである。したがって、**KDR** の判断によれば、中国は南シナ海に数個の防空識別圏を設定する可能性が極めて高い。すなわち海南島及び西沙群島を中心として少なくとも 2 個以上の識別圏を設定する。その際、係争中の礁はどのように処理するのか？含めるのか含めないのか？継続して観察する必要がある。

中国が一旦南シナ海に防空識別圏を設定すると、最初の困難な問題は、韓国から学習したベトナムが自国の防空識別圏を拡大してくることである。ベトナムの防空識別圏は海南島に近く、新空母基地、戦略核潜水艦基地は安全を脅かされることとなる。

以上